

## 旅の話 (一)

渡辺 美知夫

旅といえは、私の最初の記憶は、小学校低学年の頃連れて行かれた、多武峯という丘の上のお社、談山神社のことである。朱塗りの社殿の脇で、父は此処には藤原鎌足が祀られているのだと教えてくれたが、それ以上の説明はなかった。父は時々こうして私を連れ出すのだが、故事来歴の講釈は一切なかった。

次の想い出は大江山である。私が無事に中学校に入ったのを喜んでのことだったらしいのだが、父と二人の徒歩旅行であった。福知山を通過、河守という町に泊ったなどの記憶がある。山を降る頃から天候が急変して、山腹の民家で一夜を明かすという、忘れられない体験をしたが、次の日、天の橋立を無事見物した。日本三景の一つを初めて見たことになる。

更にもう一つの想い出は琵琶湖の東岸、つまり東海道の一部を湖伝いに歩いて、父が「義経鎧掛けの松」などというものを、面白がって私に指し示したことで

ある。熊坂長範なる者の棲家とやらを教えられたのも、この時のことであったが、長範とは何者なのかに就いては、私は未だに定かでない。

中学高校の時代は、学校が万葉集にも名が出るという岡本梅林の近くの、六甲山の麓にあった関係で、六甲山にはいろんなルートを、せっせと登った覚えがあるが、西の端の摩耶山には、不思議なことに一度も登ったことがなくて、戦後も随分経ってから、ケーブルで行って一泊したことであった。

大学時代の旅といえは、学友会の催しで、犬吠崎に行き、雄大な風光に日本離れがしてるなど、感動したことが想い出されるが、泊った宿の窓から、灯台の鋭い光が間歇的に閃くのには閉口した。学友会の催しでもう一つ忘れられないのが、御岳山詣である。主任のI先生、私の師事したS先生も御一緒だった筈なのに、何故かブランデン先生御夫妻と、山道をあくせく

登っているうちに、私一人が詩人夫妻の案内役の恰好になり、時分どきになったので、茶店の一つに入って昼食ということになって、私はフツ茶目つ気を起こした。御夫妻に、ウドンを箸で食べて貰おうという、イタズラを思いついたのだ。つい先頃私の九十二歳の誕生日の記念に御岳再訪を試みた際、その時のことを思い起して懐しさ一しおであった。

学生時代のもう一つの鮮烈な思い出は、確か二年生の夏のこと、山中湖畔に新しく寮が建ったと聞いて、帰省の途次寄り途を試みたのだが、これが大層気に入って、数日間泊まりこんで、小型のヨットがあったを幸い、湖上の舟遊びにうつつを抜かした。夜の引き明け方に聞こえた、鈴を振るような鳥の声を、今も折にふれ想い出す。

昭和八年（一九三三年）漸く大学を出ると、主任教授のひと声で旅順に行くことになり、これは大阪商船の定期便で、神戸から門司を経て、黄海を北上、大連に着くまで四日がかりの、生まれて初めての海の旅であった。その後は学校の休暇毎に、関西の実家との間を往復するのだが、いつも船旅で、只一度朝鮮經由、釜山から連絡船で門司に渡る、汽車の旅をしてみ、

警察官らしい夫婦と隣合わせになり、夜汽車の眠りが明けたところ、妻君がいきなり自分の膝にもたれてまだ寝ている夫の髪の毛を驚掴みにして、引き出したのを見て吃驚した。これが夫婦というものかという思いもあって、未だに忘れ難いのだが、汽車の旅はこの一度で懲りた。

やがて昭和も十六年になり、そろそろ大陸の旅もして置かぬという気がして来て、その年の夏休みは帰省を断念して、休み全部、四十日をかけて中国本土に出掛けることにした。昭和六年に始まった満州事変が、支那事変に拡大して、更にアメリカ相手の大戦争に突入しようとする矢先のことである。

「支那」は日本軍が土足にかけている最中であつたわけだが、臆病者の私がそこへのこの出掛けて行って、別に身の危険を感じるでもなく、四十日間を過ごしたのが、今思えばよくもまあという感じである。この旅には弁論部員と称する学生が八人、護衛という名目で同行したが、彼等がスワコソと緊張したのは、旅の前後を通じて只一度だけであつた。

大連港を船出して、最初に立寄つたのは塘沽（タング）であつた。ここで強い印象を受けたのが水の色である。海の

碧さに、茶色に濁った河の水が、楕円形に押し出している光景であった。この風景は後に上海の河口でも、より大規模に眺められた。日本では水といえば澄んだものという印象が先に立つが、中国では水は極めて細かい土に茶色に濁っているのが常態なのだった。ところが後に、確か済南に立寄った時であったか、日本と同様澄んだ水の一廓かくがあつて、泉が滾々と、猛烈な勢いで溢れ出ており、眼を洗われる想いがしたが、「大公望釣魚処」という小さな立札があつたのには、思わず頬がほころんだ。

塘沽から濁り河を朔つて、天津に着き、日本風の宿に一泊することになったが、部屋に通ると日本人の女中さんが

「暑いから窓を閉めましょうね」と言つて、ガラス窓を閉めて廻つてくれたのには驚いた。日本と話が逆だなと思つた。

そこから先は鉄道で北京に行ったと思う。北京には五日間滞在したのだが、紫禁城の手の込んだ彫刻のある大理石の、ギッシリ詰まった筈の繋ぎ目から、野の草がそちこちに生え出ているのが、乱世を想わせて、感慨を催させた。

北京の街で一番心に温かく残つたのは、夕方通りかかった胡同フイトの風情であつた。胡同とは北京の謂わば下町にある、狭い露地のことで、両側に民家が建て詰まつた、その一戸毎の出入口に無雑作に坐りこんだ男女が、露地の向う側に同じように坐りこんでいる人物との間で、賑やかに対話を交わしている風景が、意味はサツパリ判らないながら、なんとも伸びやかで温かつた。政治家や軍人が何をしようと、そんなことにはまるで頓着のない、庶民の開けつぷろげの熱気が伝わつて来て、中国の懐の深さが思い知られた。今から数年後北京で開かれることになったオリンピックに備えて、現在その胡同が取り払われているらしいのは、何とも心残りなことである。

北京を根城に、一日は定石通り八達嶺に行き、万里の長城を見物した。車一台は通れそうな、しっかりとした幅があつて、築造にどれだけの人数が、どれだけの日数を要したものかと、想いを久しくした。東側は急峻な崖になつていて、この向うは蒙古なのだなと思つた。

又一日は更に足を伸ばして、張家口まで行つてみた。此処で一泊したが、その時味わつた中国料理の味が未

だに忘れられない。余程こちらの体調が良かったせい  
かも知れないが、蒙古の砂漠の細かい砂粒の香りが、  
北京上海の本格料理を凌いだ形になったのかとも思え  
る。この辺りになると長城も簡素な造りになっていて、  
蒙古との交易路という印象の方が強かった。此処まで  
来ると北京上海などの大都会よりも、空気が一段と澄  
み切っていて、夜は満天の星々が、手を伸ばせば届き  
そうであった。

張家口の先には雲崗の石窟がある。北魏時代、西暦  
では四六〇年代頃から掘始められたというが、岩山を  
削り貫いて、大小の万を数える佛像が刻まれている。  
正面の巨大な大佛は手つかずの素のままだったが、石  
壁の向って右側半分はあられもない赤色黄色に塗り直  
されていて、ガッカリした。京都大学のM教授が調査  
に来ておられたのが印象に残っている。

北京からは済南を経て南下し、確か兗州<sup>エン</sup>という駅で  
降りて、駅前の旅館に一泊した。朝鮮の人の経営する  
宿のようであった。翌る朝宿の主人が洩瓶<sup>しびん</sup>の中身を、  
玄関先の大甕の中へ、サッとあけたのを見て、これは  
日本人の仕草ではないなと思った。

この駅前を朝八時に出発して、ほぼ真東に七里とい

う曲阜を目指した。祖父から受けた論語の素読のお禮  
詣りの積りであった。旅行中主要な駅には必ずと言っ  
てよい程旅順工大の卒業生が居て、私共の行動はすべ  
て鉄道電話で申送られていたらしく、兗州の駅でも、  
日本語で、曲阜まで素手で往復するのは、当節甚だ無  
謀なことだと忠告されたが、

「私のような無名の人間に、高価な鉄砲玉を費うよう  
な者は居ませんよ」と嘯<sup>うそぶ</sup>いて私は歩き出した。日本の  
田舎と違って、中国の田園風景は単調で退屈な道中で、  
今何とも想い出せないが、曲阜の町もうらぶれていた。  
今はテレビなどで見ると宏壮な建物が建ち並んで、豪  
壮という感じさえするが、私にはそういう印象がまる  
で残っていない。孔子が産湯をつかったという小さな  
井戸があつた覚えがある外は、まるで記憶に残るもの  
がなかった気がする。とにかく宿願を果して満足で  
あった。のんびりと元来た道を引返し、夕方無事に元  
の駅に帰り着いた。駅の前輩は本気で無事を喜んでく  
れた。

それからは長途南下して上海に出た訳だが、途中は  
夜汽車で真暗、何も見えなかったという覚えしかない。  
徐州とか南京とかも通過したのであろうが、南京へは

上海から更めて出直したのだった。

上海には大学同期のW君が、同文書院の教師として住んでいて、街のそちこちを案内してくれた。大通りはまるでヨーロッパの街のようで、幅広く立派であったが、一步裏通りに入ると、一度など行き倒れの人間の骸が埃にまみれたまま放置されているのにぶつかって、度胆を抜かれたりしたが、それより何より言葉が、北京官話とまるで音感が違うのに驚いた。詠舌とはこういうコトバのことを云うのかと思った。尤も詠舌という熟語は、現在私の手許にある漢語辞典には載っていないが。

上海に来たからには、水の都蘇州を訪ねるのは当然の成り行きである。四方八方に伸びているらしい水路に、小舟の列が延々と岸辺を塞いでいるのが見えたので、あの舟はと訊いたら、あれは故人をそれぞれの故郷に還すために、順番待ちをしているのだと教えられた。故郷とは生きている間だけのことではないのだなと感銘した。尤も何故順番待ちをしなければならぬのかは、つい聞きそびれた。小舟には大きな棺らしいものが載っている。なんでも中国では棺は生前に造っておくものだそうで、裕福な人ほどいろんな金属の容

れものを重ねて、贅を盡すものなのだそうです。

蘇州の南西には、是又有名な杭州がある。そこへも行ってみようと言ったら、大変な剣幕で止められた。杭州は杭日精神の際立つて強いところだから、近付くのは危険だというのである。学生達は何処からか銃を調達して来て、意気込んでいたが、結局断念させられた。学生達がスワコソと緊張したのは、前述の通り、この時只一度だけであつた。学生たちは逸る心をもて余してか、確か「西湖」と教わった湖のほとりの草原を掻き分け廻っていたが、偶然稲藁の堆を取除けたら、等身大の黒っぽい石碑が現われた。埃を拭てみると、碑の表に有名な詩が彫られている。

#### 楓橋夜泊

月落鳥啼霜滿天  
江風漁火對愁眠  
姑蘇城外寒山寺  
夜半鐘聲到客船

この詩のことは私はすでに習い知っていた。高校時代大阪に漢学塾を開いておられたZ先生の唐詩選の講

義の中から習っていたのである。後に大学で英文学の S 先生に、この詩の作者は張繼と云って、所謂 one poem poet であると伺った。

南京へはこの後廻った。中山陵を訪ねるのが只一つの目当てであつたが、揚子江（長江）の岸辺に行ってみることも出来て、向う岸が見えないのに日本の川とのスケールの違いを想わせられたが、此処でも川の水は茫々<sup>ぼぼ</sup>と濁っていた。

こうして私たちの旅の日程は終りに近付き、上海に引返したところ、猛烈な台風が近付いていて、便船が全て出航を見合わせていると云う。そこで此処でも更に先輩方の配慮を煩わすことになってしまった。

帰路青島に寄港しようとしたところ、コレラが発生した為に上陸禁止とのことで、船上から街を遠望するだけということになった。ドイツ人の造った街ということで、流石ヨーロッパ人の創作だけあって、街全体が渋いオレンジ色に統一されていて、全体に目が行き届いているなと思つたが、その落着いた家並みの丁度真中の高台に、一本灰色の煙突が見えて、街全体の調和を打ちこわしているの、あれは何かと訊いたら、日本の製糸工場のものだと言われて、参ったなと思つ

た。日本には街全体の調和をはかる伝統が、殊に東京に欠けていると、高校二年の夏初めてお江戸に上った時に覚えた感慨を新たにした。

さて此度私がどんな「大旅行」をしたのかを確かめようと、書店に出掛けて最新と思われる中国地図を手に入れ、その図上で私共の足跡<sup>あしあと</sup>をたどって見た。私達が歩いたのは、中国全土の東北隅のほんの一画に過ぎなかつたことに、今更のように気付かされて、中国とは途方もなく広い、大きな国なのだと更めて思い知つたことである。